

第3章 基本理念及び目指す姿, 全体目標

1 基本理念

本県では、平成 22 (2010) 年 10 月に「ひろしま未来チャレンジビジョン」を策定し、おおむね 10 年後を展望して、「将来にわたって、『広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かった』と心から思える広島県の実現」を基本理念に、「人づくり」、「新たな経済成長」、「安心な暮らしづくり」、「豊かな地域づくり」の 4 つの挑戦に取り組んでいます。

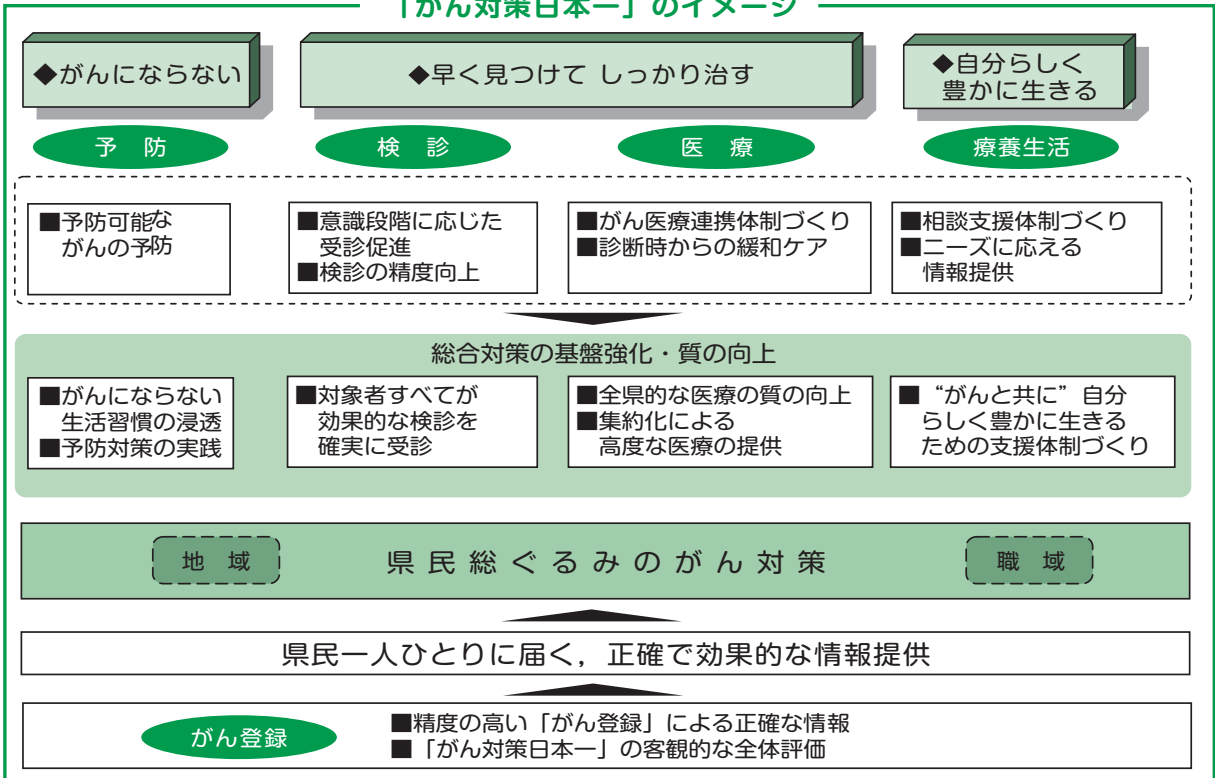
この取組の中で、特に「がん」については、死亡率の減少等を目標に「がん対策日本一」を目指し、本県の強みを生かしたがん対策を推進してきました。

今回、第 2 次計画を策定するに当たり、これまでの取組や現状について評価を行うとともに、課題の整理や今後の方向性についても検討を行いました。この検討を踏まえ、ひろしま未来チャレンジビジョンに掲げる「がん対策日本一」の実現に向けた計画として、新たに、計画の基本理念を定めました。

— 基本理念 —

- I 「県内のどこに住んでいても、どんながんであっても、必要な手立てや情報を受けられることができ、安心して暮らせる広島県」を目指し、総合対策を強化する。
- II 県民みんなが、がんを自分にも起こり得ることとして関心をもち、それぞれの立場で予防や検診も含めた「がん対策」に取り組む社会をつくる。

「がん対策日本一」のイメージ



2 目指す姿（将来像）と全体目標

「がん対策日本一」が実現した姿をイメージしつつ、基本理念に基づき総合的な施策を推進することによって、第1次計画に引き続き、「**がんで死亡する県民の減少**」やがん患者や家族の視点に立った「**すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上**」を目指します。更に、がん患者が増加する一方、医療水準の向上などにより、がんに向き合いながら社会生活を続けていくがん患者・経験者も増えており、こうしたがん患者等をみんななどで支えていくために、新たに「**がんになっても自分らしく豊かに生きることのできる地域社会の実現**」を目指します。

また、施策全体としての効果を計るために、「**がんで死亡する県民の減少**」についての数値目標を設定します。

(1) がんで死亡する県民の減少

「がんにならない」ためには、予防できるがんをしっかりと予防すること、そして、がんになっても、「早く見つけてしっかりと治す」ことが重要です。

このため、すべての県民に対する予防についての啓発や、早期に発見するためのがん検診の充実、また、がん患者に対する最良の治療の提供などにより、**がんで死亡する県民の減少**を目指します。

また、数値目標について、高齢化の影響を極力取り除いた精度の高い指標とするとともに、国の基本計画との整合を図るため、「今後5年間で75歳未満のがんによる年齢調整死亡率*を10%（死亡者数に置き換えると約330人）減少させること」とします。

目標数値「75歳未満の年齢調整死亡率」（人口10万人当たり死亡者数）

区分	現状 平成23(2011)年①	目標 平成28(2016)年②	②－①
男性	106.6人	95.9人	▲ 10.7人
女性	56.9人	51.2人	▲ 6.1人
計	80.5人	72.5人	▲ 8.0人

(2) すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上

がん罹患した県民やその家族は、疼痛等の身体的な苦痛だけでなく、がんを診断された時から不安や死への恐怖、抑うつなどの様々な精神心理的苦痛も抱えています。

更に、がん患者及びその家族は、療養生活においてこうした苦痛とともに、情報の不足や医療資源の偏在などで、自らが受けるがん医療に納得できないなど、いろいろな困難に直面しています。

こうしたことから、がんを診断された時から様々な苦痛を和らげる緩和ケアの実施はもとより、質の高いがん医療体制の確保、がんに関する相談支援や情報提供等の充実により「**すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上**」の実現を目指し、理念的な目標として掲げます。

(3) がんになっても自分らしく豊かに生きることのできる地域社会の実現

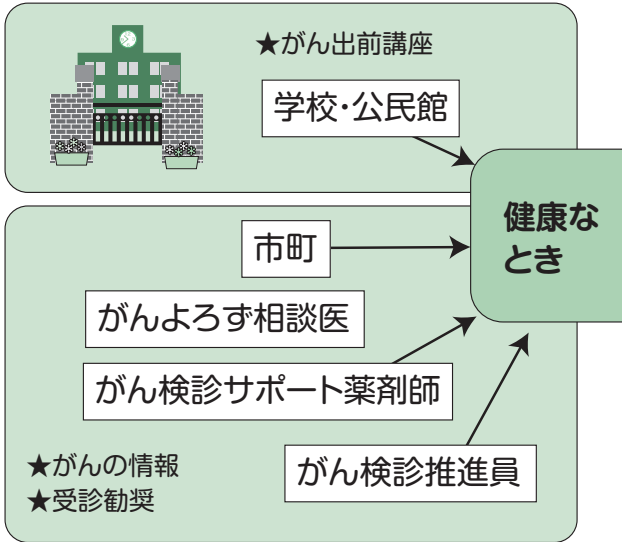
がん患者やその家族は、社会とのつながりを失うことに対する不安、仕事や家庭生活と治療との両立が難しいなど、様々な社会的不安や問題を抱えています。

こうしたがん患者及びその家族の不安などを和らげるため、新たに、がん患者及びその家族を社会全体で支える取組を進めることにより、「**がんになっても自分らしく豊かに生きることのできる地域社会の実現**」を目指します。

地域では

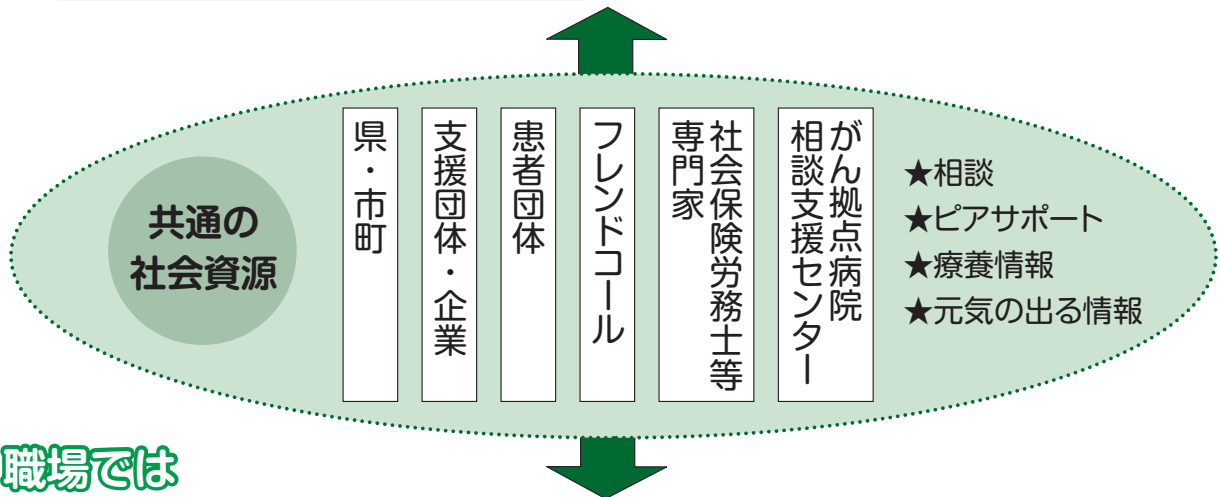
《健康なとき》

- ・がん予防法などの正しい情報が得られます。
- ・いろいろな人から検診を勧められます。



《がんになっても》

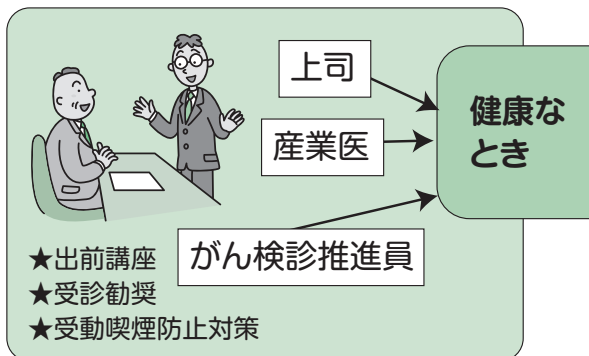
- ・自宅や介護施設など,希望する場所で,多くの人に支えられ療養することができます。
- ・自分らしい生活を送っています。



職場では

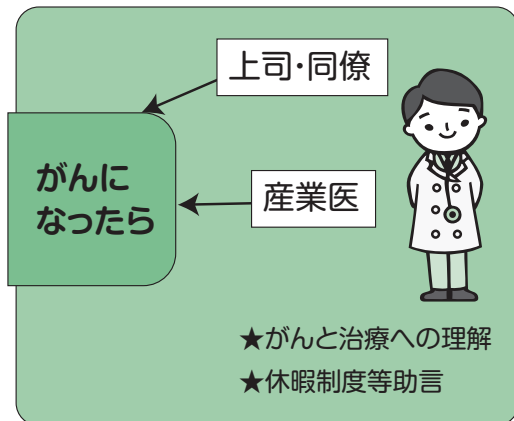
《健康なとき》

- ・がん予防や検診の正しい情報が得られます。
- ・上司から検診受診を勧められ,同僚も受診に理解があります。
- ・がんを予防する環境が整っています。



《がんになっても》

- ・上司や同僚ががんを理解しており,治療と仕事を両立しやすい環境です。



コラム② ★3つの世界初の足跡★

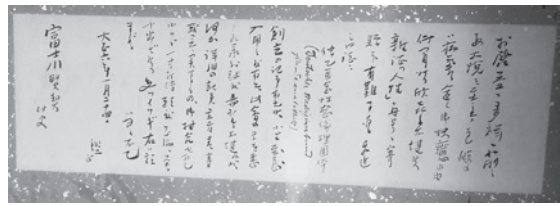
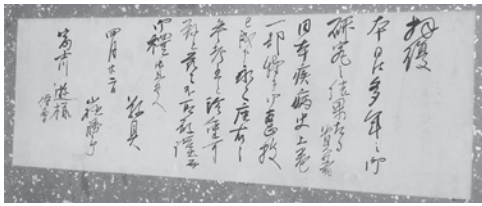
がんは、様々な原因で罹ったり、悪くなったりします。

太古の昔からがんはあったものの、化学物質やウイルスでがんになることが解ったのは、わずかここ百年の話です。

広島には、がんに関する3つの世界初の足跡があり、その喜びや悲しみを踏まえて、恒久平和や更なる科学の進歩の心の拠り所となっています。

まず、大正4（1915）年に世界で初めて化学物質による人工癌の発生に成功した山極勝三郎先生と、明治44（1911）年に世界で初めてのウイルスによる発がんとはほぼ同時期に移植可能な家鶏肉腫を発見した藤浪鑑先生の自筆の手紙が、広島大学医学部医学資料館（広島市南区）に保存されています。

これは、両先生と親交の深かった医学史の大家である富士川游先生（広島市安佐南区出身）が残してくれていたものですが、合わせて当時の世相も感じさせる文面となっており、先人の偉業を今に伝えています。



3つ目の世界初は、人類にとって極めて残念なことですが、原子爆弾の投下です。その惨状は原爆ドームや平和記念資料館（いずれも広島市中区）などで今も多くの方が知ることができますし、上述の広島大学医学部医学資料館もまた被爆煉瓦が使用されています。このヒロシマの悲劇を二度と繰り返すことのないよう、放射線被曝による医学的な解明もまた広島の地で進められてきました。

比治山にある放射線影響研究所、その麓にある広島大学原爆放射線医科学研究所（広島市南区）、市街地にある広島赤十字・原爆病院（広島市中区）を中心に研究や治療が進められ、その成果は世界の放射線の基準づくりに活用されています。

これらの糧を受け取って、広島では今後5年間のがん対策を推進していきます。